



目次

I わが街・大阪交野^{かたの}

子供の絵に緑色がない	6	国際食文化交流	40
私部城址	8	折鶴	44
綿帽子	10	御旅所	48
亀の親子	14	多羅葉	51
犬と歩けば	17	春の便り	57
交野桜	22	街角に咲く花と人と	60
女友達	29	女の美は寄り添う男が作るもの	64
年末の雪	33	SUBARU(スバル)	68
母性	36	初冬の陽だまり	72

II ふるさと長崎

春の海	80	四月の旅人	91
故郷の風	83	花の香り	109

III 韓流ドラマのこと

韓流ドラマに魅せられて	118	初雪の恋(ヴァージンスノー)	146
ソウルの恋人	122	WOWOW こんにちは	150
再会(ソウルへの旅で)	136		

風の姿にて

154

追悼 別れの言葉

166

山田幸平先生との思い出

(宇和島への旅行)

168

お礼の言葉を花束に

170

真心の人(下林昭司様を偲んで)

176

「秋桜・コスモス文芸」について

182

ぱさーじゅへの思い

184

はじめまして

186

女たちの年金

191

金 知栄詩集

「薬山のつづじ」によせて

195

堀田京子詩集

「大地の声」によせて

201

跋文 エッセイ集

「渚に寄せる波」を巡って

208

尾崎まこと

あとがき

214

I わが街・大阪交野 かたの



コスモス 糸井絹江さんの作品

亀の親子

二〇〇四年の台風は大きかった。特に大被害に見舞われた地域もあると聞く。被災にあわれた地域の方々にはお見舞い申し上げます。そんななかで私の住む街、交野市は別にこれといった被害もなかった事はよかったですと思っっている。

だが、あの台風でささやかな私の楽しみが消えてしまった。それというのは、家から歩いて五分ばかりの所に本道と交差するようにして免除川ひんじょがわが流れている。川幅四メートルか五メートルくらいかな、その川の上の本道を車も人も通っている。この街の幹線道路である。

上から下を覗くと時には小鳥が水浴びをしていたり、白さが長い足で水中に立っているの見える。濃い緑の川藻がいっぱい被っっていて川底が見えないくらいだ。それでも端のほうは藻もなく水も澄みきっている。

この春先から通る度に橋の上から下を眺めていると、川面に小さなものが二箇所突き出ているのに気づく。私は田の畦かきに近寄ってじっと見ると、突き出たものは亀の頭だった。頭から首にかけて赤い線が浮き出て見える。三十センチほどの二匹の親亀は仲良く首を伸ば

していて、川面の様をみているのだ。毎日買い物に行く時、帰る時いつも亀の観察をした。

川辺に植えられた桜が満開になり、その大半が川に落下した。大量の花弁が川面を被い尽くし、そのさまにもしばしば見とれてしまった。誰もそんな事には見向きもしない。また気付く事もないように立ち去っていく。私はひとり橋の手摺にもたれながら亀の観察を続けた。

いつしか川に遊ぶ桜の花弁も何処に行ったのか、跡形もなくなった。気温も徐々にあがった五月の頃か、また川面を見ていた。すると小さな子供の亀がいるのに気付いた。それも二匹だ。小さいくせにこちらが覗いているのをすぐさま察知して、素早くチョロチョロと移動してしまう。それがなんとも可愛らしくてしばらく見て楽しんだ。初めの内は通る度に二匹の親亀が干上がった川砂の上で甲羅干しをしていたが、そのうち二匹の子亀も真似をして首をいっばいに伸ばして、甲羅も干すようになった。

梅雨時には雨量も多いので心配になったが、亀の親子は流されずに頑張っていた。真夏になるとさすがに暑いのか甲羅干しをやめて水の中から首だけ出して、それも四つだ。子亀もおなじような格好が可笑しかった。

秋になり台風も何回か来たけれど、そのたびに気に掛かり、橋の上から観察した。台風二十二号がやって来た。それでもあの親子は元気にしていたのに、二十三号が過ぎて次の日慌てて見に行った。泥水が濁流になって暴れていた。水位が高いため亀たちは見えない。幾

日か過ぎて水が引き、川はきれいになった。川面を占めていた藻も全て無くなった。今は透明な水がさらさらと流れていて、亀の親子も見ることには無い。きつとバラバラに流されて行ったのだ。

免除川の下流は交野市の中央を流れる天の川に合流する。川幅数十メートルはあるのか、もつとあるのかもしれない。とてつもなく広い。天の川のその先は、淀川に注ぎ込まれるはずだ。かめの親子は離ればなれになってしまった。もう会えないだろうな。

今は淋しい気持ちでいっぱいだ。昨日は橋の上から見下ろすと、初冬の冷えた空気の漂う中で、白さが川の流れの中に立って、首をかしげて私を見ていた。

二〇〇四年十一月

※追記 後にこの亀はミシシピアカミミガメという外来種の亀であることを知った。縁日などで売られているミドリガメが大きくなって飼いきれなくなり、捨てられたものが成長したものだという。それが日本固有の亀を駆逐して、生態系を壊すと問題になっているらしい。環境のためにはいい方がいのだが、流されたあの亀たちの行く末がやはり気にかかる。

犬と歩けば

にわか雨の通り過ぎた午後、免除川めんじょの川べりを犬と歩く。水分を含んだ緑がいつそう鮮やかだ。六月の甘い空気をいっぱい吸い込んで、犬に引きずられながら雑草がびっしりと生える空地を走った。

「ハチベー、もつとゆっくり行ってよ！」

気がつくど私は悲壮な声を出している。爽やかな初夏の風が、さわさわと耳もとで鳴る。免除川の水位が心なしか増えたようだ。

この川はその昔大雨時には氾濫して、あたり一面が水浸しになった。その為にこの川が流れている地域の税の免除がなされたのだ。それゆえに脇を流れる川は免除川と呼ばれるようになった。

交野市には高い山の交野山こしのやまがある。その側には白旗池があり、大雨が降ると池の水と交野山からの雨量が相俟って下流川に流れ氾濫していた。

この地域に戦国時代にはお城があった。今もその名残はあって、「交野城址」と記されてすぐ傍に石碑がある。お城の近くでもあって免除となったのではと私は思う。